

西川遺跡(第 3 次)ほか 発掘調査

所在地	鈴鹿市郡山町字野口 800-1 外 12 筆
調査目的	宅地造成工事に係る埋蔵文化財の記録保存
調査期間	平成 19 年 6 月 23 日～平成 19 年 9 月下旬 (予定)
調査面積	約 6,200 m ² (現在は約 4,000 m ² の調査が終了)
調査主体	鈴鹿市考古博物館 (鈴鹿市国分町 224 番地) 電話 : 059-374-1994 e-mail : kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp URL : http://www.edu.city.suzuka.lg.jp/museum/
調査協力	株式会社 四門

1 はじめに

宅地造成工事に係る事前の埋蔵文化財の記録保存として、市内郡山町所在の西川遺跡(第 3 次)ほか 2 遺跡を 6 月 23 日から発掘調査しています(資料 1・2)。今回、調査している範囲は約 6,200 m²と大規模であり、西川遺跡、^{にしかわ}郡山野遺跡、^{こおりやまの}郡山野田遺跡の 3 つの遺跡にわたっています(以下では、この 3 遺跡を総称して「西川遺跡ほか」とします)。

西川遺跡ほかは郡山町字野口に所在し、中ノ川右岸の河岸段丘上に位置しています。この段丘上は、^{すえの}末野遺跡や^{にしたかやま}西高山遺跡、^{みしば}三芝遺跡、^{つかごし}塚腰遺跡など数多くの遺跡が密集する地域として知られています。これまでに『太陽の街』の造成工事をはじめとして、大規模な調査がたくさん行われてきました。

また、現在の酒井神社周辺にある^{みしば}三芝遺跡は、周囲に土塁が現存していることなどから、飛鳥～奈良時代(今から 1,300～1,350 年ほど前)における^{あんげぐんが}奄芸郡衙跡ではないかと考えられています。郡衙は地方の役所で、多くの施設が建ち並び、近隣には郡衙に勤める役人やその家族が暮らしていたものと考えられています。

今回、見つかった^{たてあなじゅうきよあと}竪穴住居跡や^{ほったてぼしらたてもものあと}掘立柱建物跡は、出土した土器の特徴から飛鳥～奈良時代のものです。ちょうど奄芸郡衙が建てられたのと同時期の住まいのあとが発掘され、この場所で奄芸郡衙に関わる人々が生活していたのではないかと考えています。

その後、奈良時代以降の生活のあとはほとんどみられません。次に見つかっているのは鎌倉時代ごろ（今から800年ほど前）に良質な粘土を採掘したと考えられる穴（^{どこう}土坑）などです。さらに、江戸時代の終り頃（今から150年ほど前）には、瓦を焼く作業場として利用されていたようです。

2 発掘調査の成果

(1) 飛鳥～奈良時代の古代集落跡が発見された。

- ① 古代奄芸郡の郡衙推定地とされる三芝遺跡（酒井神社）から南西に約600mのところであり、それとほぼ同時期の飛鳥～奈良時代の集落跡が発見されました。
- ② 西川遺跡の第2次調査において^{すずり}硯の破片2点が出土したことから、郡衙に勤める役人の住まいとも、^{すえき}須恵器の生産に関わった工人の集落跡だとも想定されています。しかし、今回の調査では、このような有力者を示すような遺構や遺物は見つからなかったことから、集落の中心からはなれた西端部にあたると考えられます。

(2) 鎌倉時代の粘土採掘穴と考えられる^{どこう}土坑群が見つかった。

- ① 西川遺跡の第2次調査の際にも数多く見つかった、粘土を採掘したと考えられる土坑が3基見つかりました。
- ② 土坑はいずれも粘土層を掘り抜いて砂層に達しているため、その目的は粘土の採掘にあったと考えています。
- ③ それぞれの穴から、^{やまぢやわん}山茶碗と呼ばれるお椀がほぼ完全な形で出土しています。

(3) 郡山町の近世産業史を考える上で重要な瓦窯跡が検出された（資料4-2）。

- ① 調査地の周辺は、通称「カワラヤマ」と呼ばれており、その由来となったと考えられる瓦窯が2基見つかりました。
- ② いずれも^{だるまがま}達磨窯と呼ばれる形態で、窯の下部構造が良好に残っていました。
- ③ ^{さんがわら}棧瓦と呼ばれる江戸時代後半以降に一般的となる瓦の他に、用途不明の瓦質製

品も出土しました（資料 4-8）。

3 検出遺構（資料 3）

(1) **竪穴住居**・・・6 棟（竪穴住居 1・2, 5・6 が奈良時代, 同 3・4 は時期不明。）

① 竪穴住居は 3 箇所です。2 棟ずつの、計 6 棟が見つかりました。その大部分が重複していることから、建替えが行なわれたと判断されます（写真 4-1・3）。

(2) **掘立柱建物**・・・6 棟（掘立柱建物 1～3 が飛鳥～奈良時代, 同 4～6 は時期不明。）

① 建物の側縁にのみに柱をたてる、^{がわばしらたてももの}側柱建物が 3 棟見つかりました（掘立柱建物 1・3・4）。いずれも方位を揃えて建てられていて、極めて計画性が高いものです。

② 建物の全てに柱をたてる、^{そうばしらたてももの}総柱建物が 2 棟見つかりました（掘立柱建物 5・6）。2 間×2 間の規模で、倉庫として利用されていたものと考えられています。

(3) **区画溝**・・・2 条（時期は検討中。）

① 調査区を南から北にほぼ直線にのびる溝 1 条と、それに直行する東西方向の溝 1 条によって区画されています。また、溝は真北ではなく、東へ 20 度前後傾いています。

② 区画された内部には多くの建物等があったものと推定されますが、削平のため多くは失われてしまっています。

(4) **土坑**・・・多数（5 基が飛鳥～奈良時代, もう 3 基が中世の他は, 時期不明。）

① 土坑 2 から^{どぼ}土馬 1 点（資料 4-5）と土器類（資料 4-4）が多く出土しています。

② 土坑 3 から^{ぼうすいしゃ}紡錘車が 1 点出土しています（資料 4-6）。

③ 土坑 34 から^{てつぶ}鉄斧（資料 4-7）や勾玉が各 1 点出土しています。

④ 土坑 90 から^{つきぶた}須恵器杯蓋などが出土しています。

⑤ 土坑 82～84 からは各々 1 点ずつ、完全な形に近い^{やまぢやわん}山茶碗が出土しています。

(5) **達磨窯**・・・2 基（2 基とも江戸時代後半頃）

① 1 号窯では^{さんがわら}棧瓦が多く見つかりました。

② 1 号窯は残りがよく、床面を 2 回以上貼りかえた痕跡が見つかりました。このことから、少なくとも 2 回以上瓦が焼かれていたことが分かりました。

③ 2 号窯からは棧瓦の他にも、用途不明の瓦質製品などが見つかりました。

- ④ 2号窯は南側の半分しか残っていませんが、1号窯はど頻繁に使われていなかったようです。

4 その他

遺物量	コンテナバット (34.5×53×15cm) に 11 箱
土馬のサイズ	長さ 5.5×幅 6×厚さ 2cm, 重量 31 g (頭部の破片のみ)
紡錘車のサイズ	直径 4cm, 厚さ 2cm, 重量 33 g (完形)
鉄斧のサイズ	長さ 6×幅 4×厚さ 3cm, 重量 125 g (半分程度残るのみ)
勾玉のサイズ	長さ 4×幅 2.5×厚さ 0.5cm, 重量 10 g (完形)
用途不明の瓦質製品	長さ 31cm×幅 14cm×厚さ 8cm, 重量 4, 209 g (完形)

【用語解説】

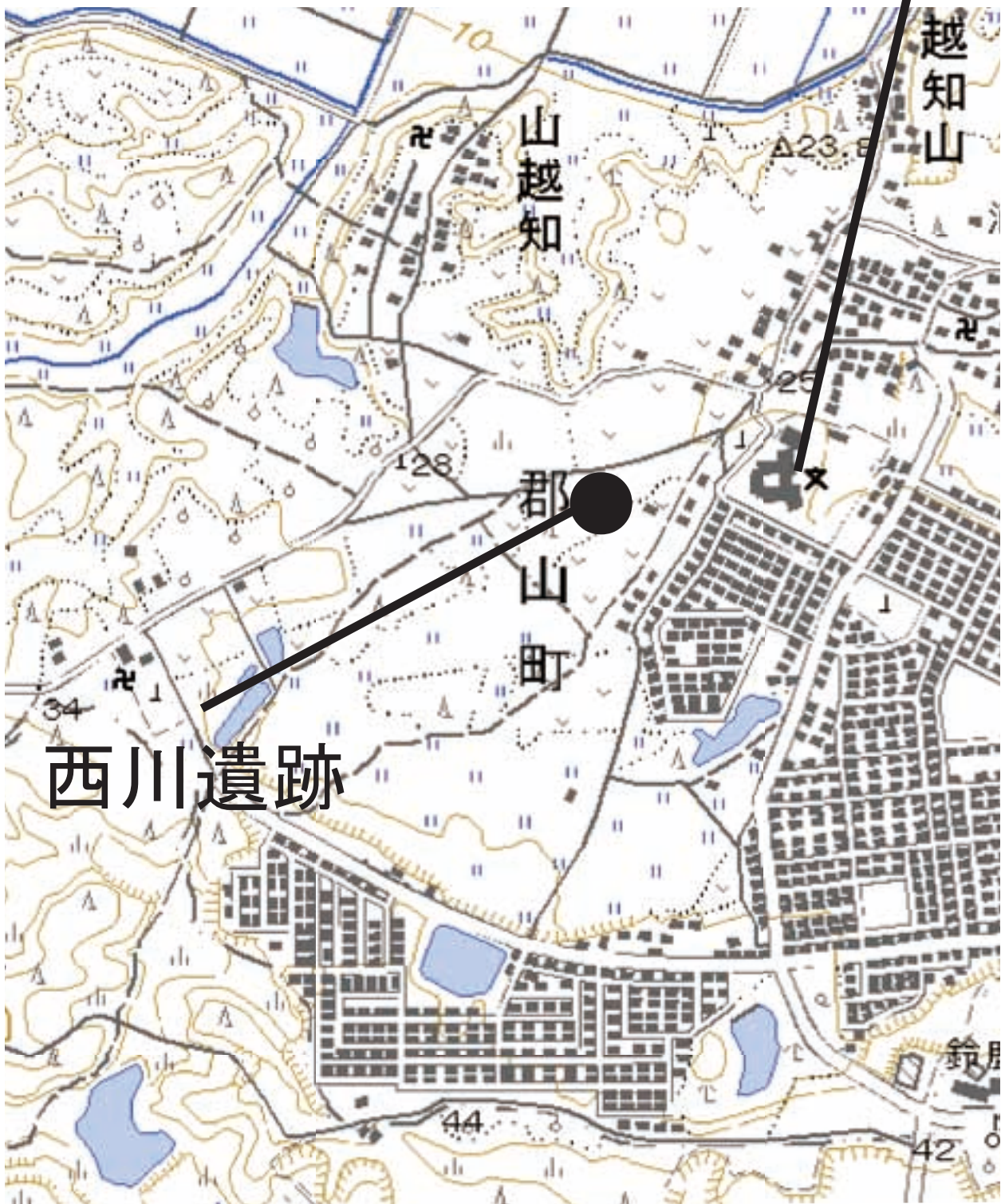
達磨窯・・・中央に焼成室（瓦を焼く場所）を置き、両脇に燃焼室・焚き口を設けた地上式の小型窯。焼成室に畦を持ち、中央に作られた峠によって燃焼室からの火焰を下から上へ上昇させる構造を持つ。主にいぶしがわら燻瓦を焼くために中世末から作られ、昭和 40 年代まではよく見られ、現存するものもある。窯を横から見た形が、達磨大師が座禅を組む姿に似ていることから、この名で呼ばれる。

土馬・・・土製の馬形。埴輪と区別してこの名で呼ぶ。河川の神や雷の神が馬を好むとする伝承がユーラシア大陸に広く分布することから、土馬を生きたウマの代わりとして水神に供えたとするすいじんほうけんせつ水神奉獻説がある。一方で、ウマを神霊の乗り物とする考え方も朝鮮半島や中国～東北アジアにあることから、疫病の神を他界に送り出すために捧げたとする説もある。いずれも、日常の道具ではなく、さいし祭祀に用いられるものと考えられる。

紡錘車・・・長くつないだ繊維によ撚りをかけて糸をつむぐ重りのことをいう。紡錘車の中心に開いている穴に棒を通し、そこに繊維をくっつけて全体をコマのように回転させながら撚りをかけて糸を作る。

資料 1

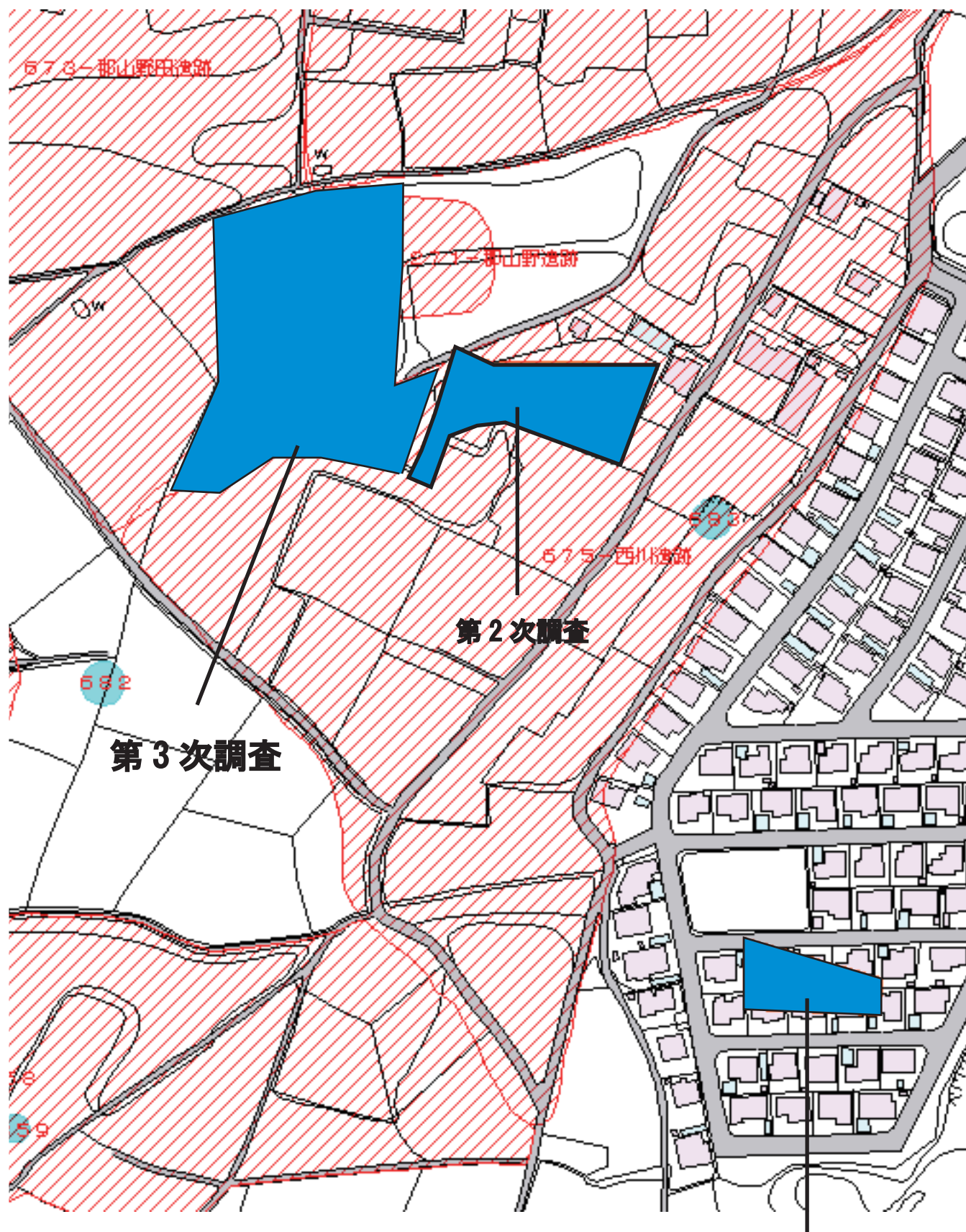
郡山小学校



西川遺跡

西川遺跡ほか 位置図 (1 : 25,000)

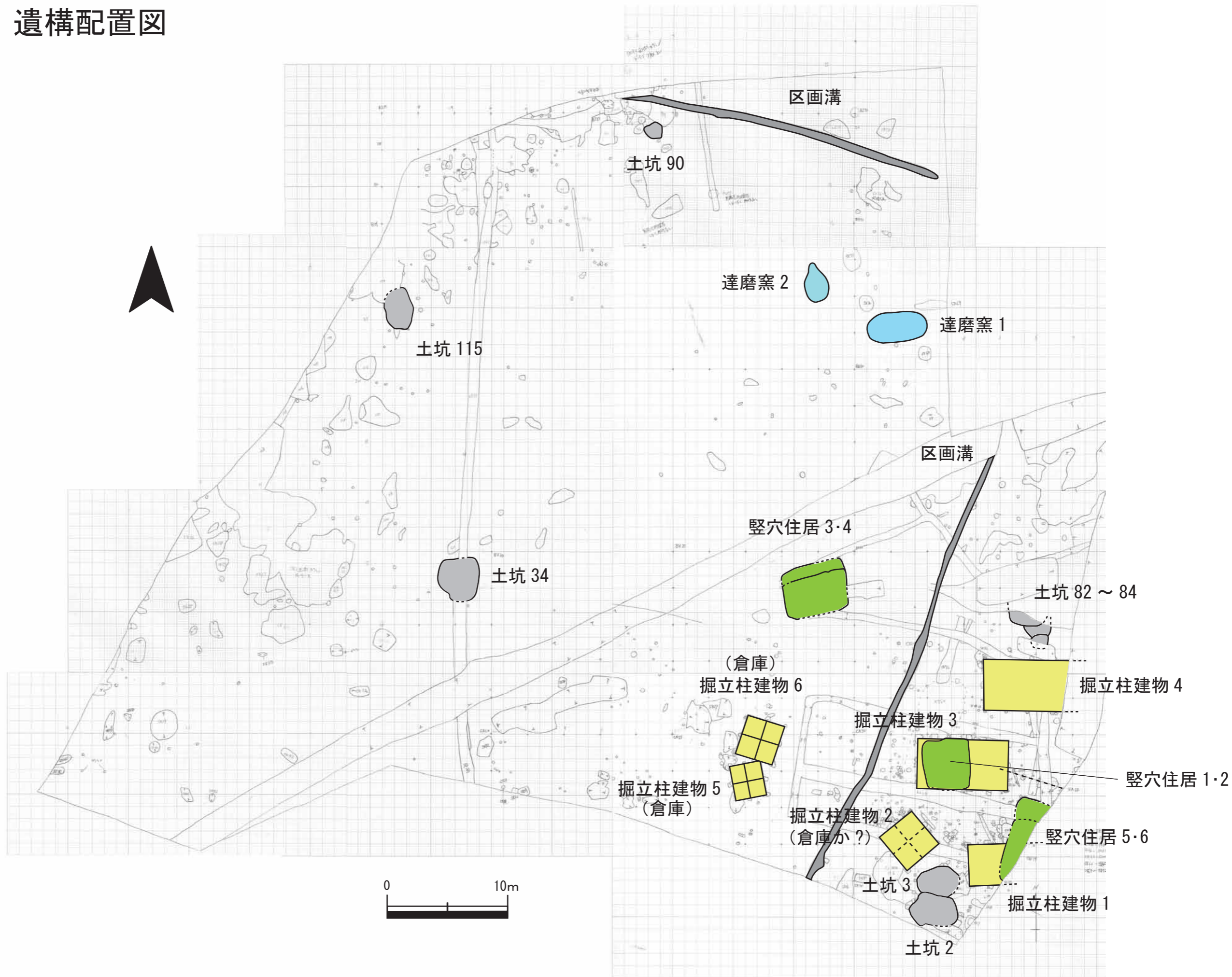
資料 2 西川遺跡第 1 ～ 3 次調査位置図



(1 : 2, 500)

第1次調査

資料 3 遺構配置図



資料 4 調査写真



1. 竪穴住居 1・2 遺物出土状況



2. 達磨窯 1 掘削状況



3. 竪穴住居 3・4 掘削状況



4. 土坑 2 遺物出土状況



5. 土坑 2 出土 土馬



6. 土坑 3 出土 紡錘車



7. 土坑 34 出土 鉄斧



8. 達磨窯 2 出土 用途不明瓦質製品